令和６年度

第３回海老名市総合教育会議

令和６年度第３回総合教育会議議事録

１　日　　付　　令和６年11月23日（土・祝）

２　場　　所　　リコーテクノロジーセンター

３　出 席 者

市長	内野　優	教育長	伊藤　文康
教育委員	平井　照江	教育委員	濱田　望
教育委員	武井　哲也	教育委員	海野　望

４　事 務 局

教育部長	江下　裕隆	教育部次長	吉川　浩
教育部教育支援担当部長兼教育支援担当次長事務取扱兼教育支援課長事務取扱	麻生　仁	教育部参事兼教育総務課長	西海　幸弘
		教育部参事兼就学支援課長兼指導主事	山田　圭
教育部参事兼教育支援課教育支援担当課長兼教育支援センター所長兼指導主事兼支援係長事務取扱	小薗　洋	学び支援課長	松本　晃子
		就学支援課健康給食係長兼食の創造館長	加藤　謙次
教育支援課副主幹兼指導主事	五十嵐　光	学び支援課主幹兼学び支援係長	中島　裕子

５　協力企業出席者　　リコークリエイティブサービス株式会社

ファシリティーサービスセンター中日本第一総務室長	久保　由美	総務グループリーダー	脇ノ谷　勝利

６　書　　記

教育総務課総務係長	小林　亮介	教育総務課主査	片山　考人
教育総務課主査	伊藤　景子	教育総務課主任主事	小豆畑　めぐみ

７　傍 聴 人　　18名

８　開会時刻　　午前10時00分

９　協議事項（教育大綱の取組について）

（１）　学校のDX化の促進

（２）　こども・学校支援事業の実践

（３）　魅力ある学校給食の実現

10　閉会時刻　　午前11時45分

○教育部次長　皆様、おはようございます。定刻となりましたので、ただいまより令和６年度第３回海老名市総合教育会議を開催いたします。

本日司会を務めます海老名市教育委員会教育部次長の吉川浩と申します。よろしくお願いいたします。

なお、本日は、リコー様の会場をお借りしての開催となります。ここでリコー様のご紹介をしたいと思います。本日、この会場を借りるのに当たりまして、いろいろご協力、また、ご尽力いただきました、リコークリエイティブサービス株式会社の久保様と脇ノ谷様が後ろのほうにいらっしゃいますので、ご紹介させていただきます。（拍手）

ありがとうございました。それでは、会議に先立ちまして配付資料の確認をさせていただきたいと思います。会議資料としましては、Ａ４の紙で会議の次第、それから、ホッチキス留めのツーアップで印刷されましたスライドの資料の２点でございます。また、そのほかの資料といたしまして、カラーの印刷されているもの、こちらはフルインクルーシブ教育「対話の場」のご案内のパンフレットでございます。こちらのフルインクルーシブ教育「対話の場」につきましては、11月26日、火曜日にリアル空間として文化会館で、また、12月７日にメタバース空間で行いますので、ぜひご参加いただきたいと思います。

また、本日スライドの資料につきましては正面のスクリーンにも投影いたしますので、そちらでもご覧をいただくことはできますけれども、スクリーンの撮影につきましてはご遠慮いただきますよう、ご協力をお願い申し上げます。また、本会議は全体を通じまして海老名市ユーチューブチャンネルにてライブ配信しておりますので、そちらもご了承いただきたいと存じます。

それでは、会議のほうに移りたいと思います。

まず、次第の２、市長及び教育長からのご挨拶でございます。はじめに内野市長、よろしくお願いいたします。

○内野市長　おはようございます。まず冒頭、リコーの皆さん、ありがとうございます。この会場を貸していただきまして。この会場は懐かしくて、ここができたときに初めて見たとき、すばらしいなと思いました。椅子がもう自動的に、後ろの椅子が全部出てくるのですね。こちらのステージで、いわゆるクラシックの演奏会ができます。足らないときはこちらの壁が全部取れる。そうすると、向こう側のエントランスとこっちを利用して相当な人数ができる。これを見本にして造ったのがビナレッジです。ビナレッジも基本的には、これだけの規模はありませんけれども、これの何分の幾つかですけれども、椅子が前

へ出てきてステージは可動式。そして壁も取れて倍の人数が使用できる形にしました。これは民間のやっていることを見習っていくと、いいことが多く私はあると思っています。これからもやっていきたいと思います。

今日は皆さんもこのビルの上から見られるのかな。ぜひ見てください。最上階。最上階から海老名を見るとすばらしく見えます。しかしながら１つだけ、小田急がタワーマンションを建てましたから、あれがなければ本当によかったのですけれども、どんどん建っていますから、あれがないときに、ここのリコーの一番上に防犯カメラを設置しました。これは東日本大震災以降に全体を見たいということで、１億円をかけてこの部分にカメラを設置して、市内を全部見られるでしょう。市内は７割方見えます。見えないところは少し南部のほうの崖のほうと東柏ケ谷の柏ケ谷の部分ですね。あの辺も少し見えないところがありますけれども、７割見える。そういった部分では、川の増水や、あるいは近隣まで見えます。ここのカメラで、ずうっと横浜も見ますと、ランドマークタワーがありますよね。あそこの部屋が電気のついた、つかない、全部分かります。平塚の湘南平を見ますと、男性か女性かすぐ分かります。最上階へ行くと私の家がよく見えますから。その部分では、プライバシーの関係では相当な配慮をして、きちんと規則をつくってやっておりますので、その部分では問題ないと思っています。

しかしながら、こういった形が必要なのだなと。全体を見ないと災害時に対応できませんので、そういった関係ではリコーと連携しながらやっている。今年はリコーとも包括連携協定を結びまして、教育、文化、様々な点で連携をしていきたいという形で動いております。民間の力を借りながら行政がいいものを伸ばしていくことも必要だろうと思っています。

今日は３回目の総合教育会議になります。海老名だけです。こんなに多くやっているのは。年４回。ほかのところはやっていない。大体１年に１回、市長室かどこかの会議室を借りて、教育委員会と５人、６人ぐらいで話して30分ぐらいで終わるというのが通常だと聞いています。これだけやっているのは海老名だけで、よく教育委員会も付き合っているなと思いますけれども、形式に捉われず、いろいろな関係で皆さんに知ってもらいたいというのが教育長の意見でありますから、どんどん聞いていただいて、最後に、私は進行をやっていますから、皆さんから聞きたいことがありましたら手を挙げていただいて、お話を聞いてほしいなと思います。どうかよろしくお願い申し上げます。

○教育部次長　ありがとうございました。

続きまして、伊藤教育長、よろしくお願いいたします。

○伊藤教育長　おはようございます。ここにいたら、このままどこかの小学校に体育館として持っていきたいなと思ったぐらいだったので。２階のフロアもまた広くて、こどもセンターもいいけれども、ここで仕事をしたいなと思ったところでございます。

今、市長からあったように、総合教育会議ということで、市民の方々と市長と教育委員の話合いを聞いていただいたり、ご意見いただくということで、海老名はずっと最初から市長の思いもあって、それをとにかくやろう。市長自身もタウンミーティングで、いろいろな場所を常に回るということで、現地現場主義ということでやっていますので。でも、これ自体は文部科学省からも紹介されているというか、海老名市の取組として、文部科学省のほうもこういう形で進めたいという気持ちは実はあって、でも、形式的な会議になることが多いので、一例として海老名の取組は国からも、文部科学省からの例示というか、示されているところでございます。

そういう中で、今日はDXということで、今日は和田校長になるのか。和田校長先生、いますね。今泉小学校を増築したときにも、リコージャパンといろいろやり取りしながらICTの関係を進めたりもしたので、やはり企業の方々の持っている力を借りて、学校もどんどんイノベーションしていくことが必要かなと思っていますので、これからのDXの進め方について紹介します。

もう１点は、本当に子どもたちの小学校のいろいろな活動、中学校の活動に、実を言うと海老名市内の企業が協力いただいているということで、２番目ですが、学校の活動の中での企業との連携をどう図るかを提案しますので、ご意見いただきたい。あとは、３番目は最後、今年から始まった中学校給食について議題といたしますので、ぜひ皆さんのご意見というか、何かありましたらいただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

それでは本日、よろしくお願いします。

○教育部次長　ありがとうございました。

続きまして、次第３の協議事項に移らせていただきます。

本日の協議事項につきましては３件でございます。協議事項の進行につきましては、本会議の設置者でございます内野市長に議長をお願いしたいと思います。内野市長、お願いします。

○内野市長　それでは、**協議事項（１）、教育大綱の取組について**のうち**学校のDX化の促**

進を議題といたします。

事務局から説明をお願いいたします。

○五十嵐指導主事　おはようございます。教育支援課、五十嵐と申します。私からは海老名市の学校のDX化の促進について、ご説明をさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

学校のDX化とは、デジタルの技術を活用して児童や生徒への教育をよりよいものへ変革させることとしています。DXを進めていくに当たってステップがあります。まず、第１段階としては教育・業務のデジタル化、機器・システムの導入、紙の教材・教具の電子化など、これまでアナログだった手段をデジタル化させることが最初のステップとなります。そして、その先にあるDXは、デジタル技術を教育現場で用いて児童生徒の学びをもっと価値あるものにしていったり、教員が働く環境を改善して教育の充実につなげたりして変化をもたらすことを指しています。

海老名市では最初のステップであります教育・業務のデジタル化を進めてまいりました。2016年には全教員の事務パソコンを配備し、また、児童生徒情報や校務の管理、連絡、共有のためのツールとして校務支援システムを導入してまいりました。2018年からタブレット端末を導入し始めまして、全国な取組であるGIGAスクール構想によって、2021年には小学校はiPad、中学校はクロームブックを全児童生徒に配備しました。また、2020年には黒板にスクリーンを張って映し出すタイプの天吊りプロジェクターが全学級の教室に配備完了いたしました。このようにICT機器を導入し、資料をデジタル化することによって、教材準備が効率化されました。また、図や写真、動画など視覚的な教材が充実してまいりました。また、調べる、まとめるなど、子どもたちの学習方法の幅が広がってまいりました。

今年度は中学校においてデジタル採点システムを導入し、採点や学習評価のデータ収集が効率化、充実されました。また、生成AIを教育現場、教育活動や校務で活用できるように、今年の７月に市のガイドラインを策定しました。さらに、１人１台端末で使用する学校のWi-Fi、学習用ネットワークの回線の増幅工事を行いました。このネットワークのつながり具合は、引き続き調査を続けて改善に努めていきたいと考えております。そして、１人１台端末のさらなる利活用のために家庭への持ち帰りを進めてまいりました。写真はiPadの情報を見ながら自宅で調理実習を行っている子どもの様子です。ICTを活用して家庭での学習の幅が広がったとともに、ICTが身近にあることで情報リテラシー教育として

も前進したと捉えております。

このように、海老名市では教育においてICTを活用する環境、体制を整えて充実させてまいりました。それに加え、学校の先生方のお力により、授業での活用が広がってまいりました。今年度の全国学力学習状況調査、児童生徒質問紙調査の結果を見ましても、ICT機器の授業中の利用、また、授業外での利用が非常に増加しておりまして、全国と比べても上回る結果となりました。海老名市の子どもたちは積極的にICTを利用していると捉えております。

今後は学校教育のDX化、さらにデジタルの活用を広げ、充実させていきたいと考えております。そのためにこれまでのICT計画を改定し、令和７年度から３か年の海老名市学校ICT活用推進計画を今年度策定する予定です。「ICTでつながる教育、未来へつながるこどもたちの資質・能力の育成」を目標にして13の具体的な取組を計画中です。今日はその中の主なものをお伝えしたいと思います。

１点目は、市内統一で授業支援ソフトの導入を検討しております。来年度は小学校での導入を計画しております。これまで各校のICT担当の教員の皆さんとともに、ソフトの選定に向けた研究を進めてまいりました。この授業支援ソフトが、これから求められるICTを活用した学びを支えるためのキーとなると捉えております。テンプレートによる教材が充実する。また、子どもの学習状況のモニタリングや、子ども同士の学びの共有がオンタイムで行えること。さらに、ソフトを活用して取り組んだ子どもたちの学習の記録をデジタルで管理することで評価と指導が一体的に充実していくと考えられます。教材研究の充実と効率化、個別最適・協働的な学び、教育データの活用、そして子どもも教員も使いやすいという点で大きなメリットがあると考えております。なお、このソフトについては市内で既に２校が今年度研究校として先行導入しております。研究校においては、活用率が全国でもトップレベルという実態を聞いております。これまでICTを得意としなかった教員からも、このソフトなら積極的に活用したいという声が聞かれております。

続いて、こちらも来年度は小学校と考えているのですが、電子黒板の導入を検討しております。現在教室にある天吊りプロジェクターのリースの更新に合わせて、プロジェクターの代わりに電子黒板を導入したらどうかと検討しているところです。子どもの気づきや考えを基に授業を進めていきたい。子どもたちの学びを広げ、深めるためには、こちらの写真のように子どもの声を黒板にたくさん書いて視覚化させていきたいと考えます。しかし、同時に視覚的な教材、子どもたちが端末で学習したことを示していきたいとも思いま

す。そうなると、現在では黒板を半分使ってしまうという状況になっています。その両方をよりよく実現させるためには、黒板とは別のディスプレーに映し出す方法が効果的であると考えています。もちろん電子黒板ですのでディスプレーに書くことができます。この電子黒板自体がインターネットとつながっておりますので、１つの大きなタブレット端末として捉えることもできます。そして何より、映像が明るく鮮明であるというメリットもあります。試行的に今年度、全小学校で使っていただいたのですが、そのようなメリットを子どもたちも感じているようでした。もちろん教員にも好評でした。

３点目は、ゼロトラストネットワークへの移行です。現在、校務のネットワークと学習のネットワークを、セキュリティ面を考慮して分離させている状況です。校務処理のほとんどが職員室に限定される状況であるのが実態なのですが、そこを改善し、多様な教員の働き方を可能にしたいと考えています。具体的には、クラウドによって職員室以外でも校務ネットワークにつながることができる。それから、校務と学習のネットワークを統合することで学習のデータと校務のデータをスムーズに連携することができる。これにより校務や授業準備の効率化を図るとともに、教育データを活用して、さらなる教育の充実を図ることができると捉えています。当然そのためにはセキュリティの強化が必要になります。どのようなネットワークセキュリティ対策にするか、しっかりと検討していきたいと考えております。

このことを含めた全部で13の取組を進めて、海老名市小中学校のICTでつながる教育を進め、未来へつながる子どもたちの資質、能力の育成を目指して引き続き努めていきたいと考えております。

校務DXの促進についての説明は以上となります。

○内野市長　ただいま（１）の学校のDX化の促進について説明がありました。委員の皆さんから質問とご意見がありましたら、よろしくお願いします。

○武井委員　丁寧な説明ありがとうございました。

結構前は、生徒たち数百人が一斉に使うとインターネット上で固まるとかいう、いろいろな問題があったのですけれども、そういったことも、ネットワークのインフラ整備という形で十分進んだことによって、さらに生徒１人１人がタブレットを使うような環境になっていることが、ここ数年の支援策を見ていてすばらしいと感じました。

そういった中で、いろいろな問題があって、例えば情報漏えいのリスクとか、教育者のITリテラシーの不足とか、そういったこともありますけれども、DX化が進むにつれて、今

度は逆に、対話とか対面でのコミュニケーションの能力の低下が懸念されると思うのですけれども、そういったことに関して、これからどういった対策をしていくのかなというところの質問なのですけれども、そういったところを教えていただければなと思います。

○五十嵐指導主事　ありがとうございます。

あくまで情報、ICTについては学習のためのツールであると捉えております。ですので、これが目的にならないよう、これをうまく活用しながらコミュニケーションを取れるように、また、対面でのコミュニケーションも授業で十分に取り入れながら進めていきたいなと。このICTを取り入れながら授業をどのように組み立てていくのか、それについても教員と一緒に考えていきたい、研究していきたいなと考えております。

○海野委員　ご説明、ありがとうございました。

今度、ICTの活用ということで、授業支援ソフト等がお試しで試験的に始まっているということですが、こちらのほうは、もう授業の中で子どもたちと対面的にやれるというか、というところがあるのと、あと、今、不登校の子たちにも学校外で勉強ができるようなものも配信しているような話を聞いているのですが、これは不登校の子たちとも双方向で授業ができたりするのかなというところと、あと、電子黒板なのですが、プロジェクターのリースがなくなって、画面があって、そこにも書き込みができる。そして電子黒板がある。電子黒板は書いたものが保存というか、印刷できたりとか、そういったような形でも使えるようなものになるのか。どういった使い方を黒板自体がしていけるのかなというのを教えていただけたらなと思います。

○五十嵐指導主事　ただいまの電子黒板につきまして、おっしゃるように、書いたものを画面として保存することが可能です。そこもデジタルのよさかと思いますので、画面のデータとして残して、その次に活用するということも活用方法の広がりかなと考えております。

おっしゃるように、やはり対面でも扱える、そしてオンラインでの活用もできるというところも、授業支援ソフトのよさでありますので、その点においても活用を図っていきたいなと思っております。

○海野委員　ありがとうございます。

神奈川県のほうでも、市では小中なのですけれども、高校のほうで不登校対策でオンラインで授業を始めるということがありまして、それをすることによって、子どもがきちんと授業ができているとか、対面の状況が知れるということもあると思うので、何かそうい

ったことにも広げていけたらいいなと思います。よろしくお願いします。

○濱田委員　ご説明ありがとうございました。

今年度の海老名市の取組という項目の中で、生成AIを使った活用をしていきたい、しておりますというようなお話が先ほどあったと思うのですけれども、ちなみに、どのような生成AIを活用して、どのような授業なりに活用しているのか。その内容を少し紹介していただけたらと思います。よろしくお願いします。

○五十嵐指導主事　生成AIについては、今言われたとおり、ガイドラインを作成して使える環境を整えてまいりました。生成AIの危険性を知っていただいた上で活用していただくという意味で、危険性、ルールづくりの点で、まずは整えていったところです。今後、そのルールを知った上で、より活用していきたいなと考えておりまして、まだ市内の中で、授業の中で、学習の中で活用しているという事例は上がっていないのですけれども、それについては研究していきたいなと思っております。

質問に対して、不確かであるがそれらしい回答が返ってくる生成AIの特徴を生かしながら、子どもたちが文章を参考にしたり、その文章を基に検討したりと、生成AIが回答してくれるものを実際に学習としてどうやって生かしていけるかということを、これから考えていきたいと思います。

○濱田委員　生成AIって、いろいろな可能性は秘めていると思うのですけれども、逆に言えば、学校教育で使うと諸刃の剣で、非常に危険なものになる可能性もあるのではないかと思います。国会の答弁の作成に使うとか、かなりスピードアップした対応ができるかもしれませんけれども、先ほど来、コミュニケーションが学校教育で重要だというお話とともに、こういうところで非常に難しい、あるいは危険という言い方は変かもしれませんが、新しい、非常にすばらしい機能を持ったICTを使うに当たって、本当に十分注意しながら、よりよい形で子どもたちに、すばらしい能力が発揮できるような活用につなげていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

○平井委員　昨日、柿の実を取っていたのですね。そうしたら低学年の男の子が帰ってきて、また偶然なのでしょうけれども、その柿の実にメジロがすごく飛んできたのです。そうしたら、子どもたちがどうしたかというと、かばんの中からタブレットを出してきて、写真を撮ってもいいですかと言うから、どうぞどうぞと言ったら、子どもがかばんからもう……。そのタブレットが、やはり少し大きいので、かばんから出すのが大変なのですよね。いろいろな教科書とかプリントとか全部出しちゃって、それからタブレットで写真を

撮り始めて、かばんを置いたまま、ちっとも帰ってこなくて、どうしてしまったのかなという状況だったのですけれども、子どもたちの生活の中に、もうタブレットというものが入ってきているのだな。写真を撮りたい。ええって。撮れるのと言ったら、大丈夫とか言って撮っていたのですけれども、あっ、こうして子どもたち、もう低学年、２年生ぐらいだったでしょうかね。子どもたちの学校生活の中にしっかり定着しているのだなという感じを改めて身近に感じました。

授業の中で今現在どのような活用状況にあるのか、少しお尋ねしたいなと思います。

○五十嵐指導主事　まずは、やはり視聴覚教材として見せる、聞かせる、映像や動画で見せるというところが１つかなと思います。また、先ほどお伝えしたとおり、今まで紙で取り組んできたプリントが、だんだんと電子化されていって、教材のデジタル化が進んでいる。それが授業で見られます。そして、授業支援ソフトという話をさせていただいたのですけれども、協働学習のために、それぞれがタブレットに書いたこと、まとめたことを教室内で共有するなどの活用が見られます。特に低学年については、今お話があったとおり、写真を撮ってそれを生かす、即時的に生かすということは、このデジタルのよさかなと思いますので、大いに活用ができているかなと思います。

高学年や中学年になりますと、すぐに知りたいことを調べることができる。そして、それをまとめていくことができる。それをこの端末１つを使って即時的にできる。そこがまたよさかと思います。これからは、コミュニケーションのツールとしても活用が見込めるかなと思いますので、それについては研究を進めていきたいと考えております。

○内野市長　今日いらっしゃっている方の中で議員も多くいらっしゃいますが、議員は除かせていただいて、ほかに皆さんのほうから何かありますか。ないですか。

なければ私のほうから２つほど。生成AIの話が出たと思う。この間、市議会議員の中で、生成AIで一般質問をつくった方がいらっしゃるのですよ。うちは答弁はきちんと書いた。これから答弁は、うちも生成AIを使ってやろうかなと思っています。それはなぜかというと、いろいろな情報を入れていくと、いろいろなことが出てくるのだけれども、それを見てそのままやるのではなくて、それを修正していくということも必要ではないかなと思って、今回はそれを職員に指示しようと思っているのです。

なぜかというと、いつも思っていたのですけれども、追悼式がありますよね。戦没者の追悼式。全く同じ文章なのですよ。私、21年間、追悼式で読んでいるのですけれども、日にちが違うだけ。ある日突然、日にちが去年の日にちになっているわけ。だから、職員は

変えているつもりかも分からない。だから、それがあるとなると見てしまうわけ。ずうっと。だから、それだったら、生成AIに今までのデータを入れて、現実的に、例えばの話、イスラエルとガザの話とか、それから、ウクライナの話とか、いろいろなところに入れていくことによって、あるいは、台湾と中国の話なんかを入れていくことによって、国際紛争の平和というものが分かるのに、今までそんなこと言わなきゃ入れないのに、今回、ぱっと入れたらすぐ出てくるのですね。びっくりした。すぐ出てくる。これだと思いました。私は。

これを鵜呑みにしてはいけない。これを自分のものにして研究をしていく。そこにはやはり生成AIを乗り越える知識とか知見が必要なのですよ。だから、子どもたちにとって、子どもたちにそこまでの知見とか知識はないのだけれども、生成AIを否定すると絶対遅れる。日本が遅れる。日本が遅れるということは、子どもたちはどんどん遅れていく。親がアレルギーを持つと。そこをうまく知見とか知識を持ちながら指導していくことが、学校教育と家庭教育の間に必要ではないかと思います。

これをうまくやらないと、日本の電子化というものはすごく遅れているということを言われていますから、それをどうやっていくかというのが、学校の今後の教育の中の１つだと思いますから、お金はかけてもしようがないから。かけたら効果が出ないといけない。だから挑戦をすることはあると思います。それは私はいいと思う。挑戦は。だけれども、これからのICTについていって、AIとか、いろいろなことをやっていって、どうやっていくかということをきちんと先生１人１人が理解しないといけない。中には、先生は、私はもう、こういうのは関係ないのだという先生は絶対いらっしゃると思う。それで、その先生に当たった生徒はそのまま行ってしまうのですよ。行ってしまうの。

例えばの話。一例を挙げます。私の子どもが今泉小学校にいました。授業参観というものを行ったら、授業参観は教室でやるものだと思うではないですか。違うのですよ。外なのですよ。その先生は子どもたちを外へ連れていって田んぼの中を歩かせるわけ。では、保護者はどうするのといったら、田んぼの外の道路で見ているの。こうやって。だから、発表が何もないわけ。田んぼの中にいる生き物の話をしたり、いろいろなことをやっているのかもしれない。親には全然分からない。それがその先生のステータスなわけ。だけれども、授業参観というのは一定の、昔から授業をやるのが普通なのに、その先生はそういうことを選んで、いわゆるありました。だけれども、１つだけ決定的なことは、学力が落ちた。その学年だけは落ちた。うちの子どもは。これは言えるのですよ。

国語の問題ってすごくシビアなのだよね。だから、一定の先生方の主張があるかもしれないけれども、そこをどうやってやっていくかが教育委員会と学校との連携だと思います。先生の意思はある。教育者としての信念はある。それは、私は否定はしません。だけれども、一定の親が期待することもあるだろうというふうに思うので、その部分のAIについてはよろしくお願いしたいということと、１つだけ。

電子黒板を来年入れるのですけれども、電子黒板を入れると黒板がなくなりますか。そこなのですよ。私が言っているのは。黒板をなくしてよ。なぜかというと、学校って昔から、戦前からずうっと変わっていないの。黒板と教壇。これは変わっていないの。なぜかというと、あの黒板のチョークが問題なのですよ。チョークを消さないといけない。チョーク、黒板消しがあるでしょう。私は、はっきり言って小学校の頃から、小中学校から黒板消しのイメージがよくないの。あれでたたかれているから。先生に。みんなそういう記憶があると思うのですよ。学校の先生は、あの黒板消しで頭をたたくのだから。硬いほう。硬いほうですよ。昔は学ランで、制服でこうやって、黒板消しではたくと真っ白になってしまって。チョークの粉は健康にいいか悪いかと考えると、よくないのではないかと思いながらやっていたの。だから、電子黒板を入れることは私は認めているのだ。だから、こっちの旧来の黒板はどうするのかという問題はあるのです。はっきり言って。

本当に先生方だってすごいなと思うな。黒板の字がすごくうまいのだよね。普通の字は下手な先生がいらしたのだけれども。だから、問題は、どういう形かというのは、やはり今後ICTなので考えてください。ホワイトボードにするのか、いろいろなことがあると思います。あるいは電子黒板をでかい電子黒板にしてしまって、全部手書きができるようにすることも必要ではないか。やるなら徹底してやったほうがいい。中途半端に半分はICT、半分は旧来のもの。これは、旧来のものを残すということが私は分からないのですよ。あの黒板を残すこと。どういう教育環境なのか分からない。よく検討してください。そうしなければ、12月の予算のヒアリングのときに、その回答を出さなければ予算は認めませんから。よろしくお願いします。（笑声）

それは課題ですよ。本当に。だって、私は従来からずっと言っていたのだから。あの黒板をやめてくれって。教育長に。もう黒板はやめましょう。いわゆるホワイトボードにして、半分は電子黒板にして、ずうっとやっていた。だから黒板も残すのですよね。それは全国でも言われている。黒板を残すって。伝統的な何かがある。だけれども、教育的なものとして本当に必要なのか、必要ではないのか。それをよく考えていただきたい。それだ

けは。と思います。

あとは、では、教育長から。

○伊藤教育長　本当に市長、子どもの頃、もう少しいい教育を受けたらよかったのになと、いつも思うのですよね。何かよっぽど悪いことをしてきたのかと思って。私はそんなに変わらないのですけれども。ただ、子どもたちが、さっき言っていたようなAIとか何かというのは、やはり学校で使うべきだと私は思っているのですよ。

というのは、ここの部分の学校って、そういう隔離された場所ではなくて、社会と同じような場所で子どもたちが生活することがとても大事で、そうでないと間違いなく、この先の時代にはそういう社会がやってきて、そのためには逆に言うと、子どもたちは小さいうちからそれを正しく使う方法とか何かを学校の中で経験することを、きちんと積み重ねることが必要だと思っています。

それから、黒板の話になったら、黒板のチョークの粉はかなり問題があるので、ホワイトボードとか、いろいろ方法があるのですけれども、子どもたち。だから、さっき言ったように、AIとかICTで全て進めると、子どもたちと直接教員が会話したりするとか、あと、顔を見たり、こういう言葉を交わすことはとても大事なので、それを即座に形に表すには、本当にホワイトボードのあれがすごく便利で、それがどんどんどんどんあると。だから、昔みたいに、全部書いたものを正しく写した人が丸とか何かで、要するに板書みたいにして、いっぱい並べたものを書くということではないのです。子どもたちの思考とか何かを整理したりするためには、先生はばんばんばんばん書いたりして、子どもの意見を聞いてやり取りするということは、とてもそれはそれで大切な場面なので。ただ、それをICTとしてどう記録に残したり、または、それぞれの意見をうまくまとめたものを形をつくり出すには電子黒板がすごく便利で、まだまだ教育の中ではそれぞれのよさとかメリットがあって、それをどううまく融合させてやるか。まだどちらかに行くほどのあれではないので、あとはまたゆっくり話をして、これが必要だと私は言いますけれども。

でも、どうですか。今、傍聴席に和田校長先生がいるから、あなたにとってはどうですか。学習支援ソフトを学校で使ってみてどんな感じですか。

○和田校長　今泉小学校で校長をしています和田といいます。学区内にこんなすばらしい施設があって、これからどんな活用ができるかなと思っています。

授業支援ソフトは、先ほど説明があったのですけれども、本校は研究校として今年使わせていただきました。活用が一気に進んで、全国トップレベルの活用があると聞いて、と

ても驚いているところなのですけれども、その活用が進んだ発端は、実は年配の先生が使い出した。これが実は大きな発端なのです。あの年配の先生が使えるのだったら……。僕らも使おうということで、若い先生たちも一気に使い出したので活用が進みました。

私は、この授業支援ソフトの一番のよさを説明させていただきます。これまでの従来の授業で、例えば、ある物語とか作品を読んで感想を皆さんノートに書きますよね。プリントとかに。先生が、では、発表してくださいと言って、１人ずつ手を挙げて発表します。時間がないから特定の子だけの発表になります。でも、この授業支援ソフトを使えば、全ての子どもたちの感想がリアルタイムで瞬時に共有できる。そうすると、ほかの子はどんなことを考えているのか、自分と違うところはあるのか、新しい考え方を見つけられるのか、そして、入力した文章に対して自分がコメントを入れられたりするのですね。つまり、今まで個の学びだったものが広がって協働的な学びになる。そういうイメージです。

ですから、今泉小学校でこれだけ活用が進んでいますので、市内全ての小学校でこれが導入されれば、きっと授業のスタイルも変わってきますし、これからの学校の授業も変わってくると思いますので、ぜひご検討いただければよろしいかなと思います。

○内野市長　和田校長、今、教育長と話をしていて、今泉小学校が増築をして1200人から1300人の校舎を造った。校舎を改築した。それで、計算間違いではないのだけれども、これだけマンションが多くなっちゃって、それよりオーバー必要なのですよ。これは。来年手を打ってしまう。どういう手を打つかというと、プレハブを校庭に建てさせていただいて、今、プレハブは、すごくいいプレハブなのだけれども、建てさせていただいて、今の旧の改修していないクラスがあるでしょう。そっちのほうに引っ越してしまう。移行して旧の校舎を全面改修する。そのときに必要なICTとか、いわゆる電子黒板とか、全部やっちゃおう。一遍に。机から椅子から全部変えていく。今後。

だから、今までのやっていた校舎の改修ではなくて、ばっと子どもたちが変わるイメージ。そういったものをこれから考えようという形で教育委員会に指示をするつもりなのですよ。これは１つは、これだけマンモス校になったところであっても、すばらしい学校だということを見せないと。生徒が多いとすごく大変だということが先に出てしまう。PTAだって大変なの。違うのです。生徒が多くてもこれだけすばらしい学校があるのだよということを示すことが絶対必要なので、それを選択的に今回やっていきたいと思いますので、どうか協力をお願いしたい。

よって、あなたは異動できないかもしれない。ただし、私の権限ではありませんから。

県教育委員会ですから。だけれども、そういった形でやっていかないといけないと思っていますので、よろしくお願いしたいと思います。よろしいですか。

○内野市長　それでは、次の項目へ行きます。次の項目は、**（２）こども・学校支援事業の実践**。時間が押していますので短くお願いします。

○学び支援課長　では、ご説明させていただきます。学び支援課長、松本と申します。よろしくお願いいたします。

こちらのページをご覧いただきまして、学校と地域をつなぐ事業主体として地域学校協働本部がございますが、これを海老名市では学校応援団と呼んでおります。地域の保護者、PTA、自治会の方などで構成されておりまして、子どもたちのために様々な活動を行っております。

学校応援団が主体となった事業でございます。左側の丸の協働活動でございますが、地域と学校の協働活動として、学校応援団では遠足などの校外学習や先生の引率の補助、登校するときの見守り活動や家庭科などで授業の補助などをボランティアで行っております。また、２番目の丸の放課後等の学習活動として、えびなっ子スクール、あそびっ子クラブを実施しております。えびなっ子スクールとは、夏季休業中や放課後、昼休みなど、子どもたちが工作や大谷歌舞伎など様々な体験できる場を設けるもので、学校の教室や体育館で開催しております。あそびっ子クラブは、学校の校庭や教室などを開放して放課後の遊びの場を提供するものです。夏はおおむね17時まで、冬は16時半まで、学校応援団の中にいるあそびっ子クラブのパートナーという有償のボランティアの方たちが子どもたちを見守っております。また、３番目の丸の体験活動ですが、学校での体験活動として田植えや餅つき等を行うときに、活動の補助をボランティアで行っております。

続きまして、次のページです。これは過去の今泉小学校のえびなっ子スクールのプログラムの例でございます。地域や保護者の方たちだけでなく、企業の方にもご協力をいただいております。四角で囲んでいるおなか元気教室は厚木ヤクルト販売会社、車掌のお仕事は小田急電鉄株式会社、ガチャポンのはんこづくりは株式会社バンダイ、金融教室は城南信用金庫のご協力の下、開催いたしました。

こちらは企業が実際に行ったときの写真でございます。先ほどのえびなっ子スクールの中でご紹介しましたガチャポンのはんこづくり、また、金融教室の写真となっております。

こちらのお写真は、海老名MINERVA AFCが杉久保のあそびっ子クラブで、フラッグフットボール教室を行ったときの写真です。また、門沢橋小のえびなっ子スクールでは、人の森株式会社様のご協力により割れないシャボン玉づくりを行いました。

続きまして、次のページで、株式会社リコー様からは、昨年度、海老名中学校で職業講話をいただいております。また、今年度は有鹿小学校のえびなっ子スクールで実施していただく予定がございましたが、残念ながら暑さで中止となってしまいました。リコーグループと海老名市とでは協定を10月から締結いたしておりますので、これからもえびなっ子スクールなどで連携させていただく予定でございます。そのほかに企業にえびなっ子スクールでご協力いただいておりまして、門沢橋小学校で木工教室、杉久保小学校で電車基地の見学、あと、デジタルマップをつくってみようという教室などを実施しております。

次のページでして、このように企業との連携については国や県からも無料の出前授業など約20の教育プログラムの提供がございまして、こちらも学校応援団に情報提供を行っております。

続きまして、このように、地域の皆様や企業の方たちのご協力の下、海老名市では社会教育計画にのっとって目標を立てております。海老名市は、育てたい子どもたちの姿は「海老名がだいすき、夢をもてるえびなっ子」でございます。これからも子どもたちのために様々な活動を行ってまいります。今後も海老名市の子どもたちのために引き続きご支援、ご協力を、ぜひよろしくお願いいたします。

○内野市長　ただいま議題（２）のこども・学校支援事業の実践について発表がありました。ご意見あるいは質問がありましたら、よろしくお願いします。

○武井委員　松本課長、丁寧な説明ありがとうございました。

えびなっ子スクールのプログラムがすごく充実していて、例えば、生徒に対して参加人数の割合はどのような感じになっているのかということを、少し質問させてください。

○学び支援課長　えびなっ子スクールの参加児童数なのですけれども、今年度で言いますと、割合といいますか、１年生から６年生までで一番多いのが、その中で２年生が多くて24パーセント、あと、続いて４年生が多くて18パーセント、あと、満遍なくいろいろな学年にも参加いただいております。

○武井委員　すごくいい企画とか、金融教室とかは、なかなか学校では勉強できないところがありますので、ぜひ多くの方に参加してもらいたいと思いました。ありがとうございます。

○濱田委員　ご説明ありがとうございました。本当にすばらしい事業で、多くの子どもたちが参加しているし、地域の方々もみんな協力されてよろしいかなと思います。

先ほどボランティアの方、非常に多くの協力者がいるということですが、１つお願いがあるのですけれども、スタートして非常に効果的にこの活動が続いていくと、ボランティアの方々が、だんだんだんだん年齢が上がってきて活動が難しくなってくるとか、そういうことが出てくるかと思いますので、できれば早め早めに地域の方々の後継者を探すとか、あるいは募集をするとか、協力を求めていくというような形で、これからも末永くこの活動が続くようにご協力をお願いしたいと思います。頑張ってください。意見だけで結構でございます。

○平井委員　学校応援団が主体となった事業ですということなのですが、少し教育委員会自体も入り込まないと、なかなか継続というところは難しいかなと思うところがあります。それは田植え等の件なのですが、なかなか後継者が見つからないという話を身近な人から聞きます。自分ができる限りはやってあげたいけれども、なかなかその後、やってくれる人が見つからないと。そういう中で、今後、学校としてはどういうふうに事業を展開していくのかなというところが、少し危惧するところなのですね。そのあたりのところは学校サイドだけでは解決していく問題ではないので、教育委員会や農業委員会等、いろいろな角度から、いろいろな行政の関わりの中で進めていかないと、なかなか学校授業として持っていくのは難しいのかなと思います。

あと、この活動の中で、ある程度のお金が市から出ていると思うのですが、この額がどうなのか。１つは、余計に仕事をしてもその分のお金は出ないので、家に持って帰って結構仕事をしているというような状況も聞きます。ですから、ある程度時間枠で支給されてはいるけれども、余分に働いている人たちが結構いるのですよという声も聞きますので、その辺の状況は洗っていく必要があるのかなと思いますので、学校サイド、学校応援団が主体となった事業ではあるけれども、ある部分では教育委員会がサポート、支援、状況把握をしていかないと、なかなかこれから先の事業を進めていく難しさというのは出てきているのではないかなと思いますので、そのあたりの見直しをよろしくお願いしたいと思います。

○海野委員　ご説明ありがとうございました。私はPTAのほうもやっているので、学校応援団には本当にお世話になっていて、子どもたちが楽しく活動している姿も目の当たりに見ているので、これからも続けていただきたいと思いますし、先ほど皆さんもおっしゃっ

ていたように、私もやはり、あそびっ子クラブの人が足りないとか、いろいろな話を聞いているので、そういったところをどうやって対策を取っていくのかなというところと、実際、PTAとかも存続するために、これからもうどんどん形が変わっていくので、そういったところでどう変わっていくか、どのようにやりやすくやっていくかというところが、すごく課題になっているので、学校応援団のほうも、これからいろいろな方面でどう言ったらいいのかという、自分たちに合った形というか、もうどんどん模索していただきたいなと思います。

意見ということで、よろしくお願いします。

○内野市長　ほかにはございますか。皆さんのほうからありますか。ありませんか。教育長、いいですね。

では、これはこれで。だけれども、本当に平井委員が言ったことは大事なことなのですね。いわゆる学校応援団だけやっていたら駄目なのですよ。学校との連携、教育委員会との連携、これこそ必要なことなので、それから継続になっていくと思いますから、どうかよろしくお願いします。

予算の関係は別の話でありますから、よろしくお願いします。

○内野市長　それでは最後に、**（３）魅力ある学校給食の実現**についてお願いいたします。よろしくお願いします。

○健康給食係長　海老名市教育委員会就学支援課の健康給食係長の加藤と申します。よろしくお願いいたします。

魅力ある学校給食の実現ということで、先ほど教育長からも、今年４月に再開した中学校給食の紹介ですとご説明がありましたけれども、それに加えて、最近の海老名市の給食の取組についてご紹介したいと思います。

まず、食の創造館別館が開館、中学校給食完全実施開始ということで、式典の様子と給食初日の様子の写真でございます。令和２年３月に教育委員会で決定しました中学校給食再開という方針に従いまして、準備をいろいろ進めてまいりました。別館、中学校給食調理施設ということですけれども、建設工事が令和４年６月に着工しまして、一回延期もあったのですけれども、令和６年１月に無事完成し、３月30日、記念式典を実施いたしました。有馬中学校の生徒からお礼の言葉みたいなものもいただいております。下の写真ですけれども、４月９日の火曜日、市内６校で中学校給食が一斉にスタートいたしました。献

立としましては、海老名トマトビーフカレーライス、鳥肉の唐揚げトッピング、キャベツの和え物、お祝いゼリーということで、ふだんなかなかカレーに牛肉を使用しないのですけれども、この日は特別に牛肉を入れまして、さらに子どもに人気の唐揚げもトッピングということで、スペシャルメニューで提供をさせていただきました。お子さんたち、生徒の皆さん、楽しそうに食べている姿が印象的でした。これによりまして、海老名市は小中学校ともに完全給食が実現ということになりまして、今後、ただ実施するだけではなくて、より魅力ある学校給食を実現したいと考えております。

少し話が戻ってしまうのですけれども、中学校給食再開に当たりまして、令和５年度に、保護者や地元の農業者の方にもご参加をいただいた中学校給食実施検討会というものを開催いたしました。そこで給食の献立についても提言をいただいたのですけれども、内容としては、地産地消食材の活用にしっかり取り組んでくださいですとか、あと、海老名市をはじめとした全国各地の名産品を活用した特色ある給食など、あと、行事食とかを積極的に取り入れて、子どもたちが楽しめる給食の実現に取り組むことというご提言をいただきました。

その取組の１つとして、こちらでご紹介するのが、パリオリンピック・パラリンピック給食ということなのですけれども、これは今年の小学校の給食で提供したものでございます。本年度の取組として、市が食材費の一部を負担する形で、小中学校でお楽しみ給食というものを実施しているのですけれども、中学校では先ほど見ていただきました初日のビーフカレーが１回目、小学校につきましては、今、こちらのスライドに載っておりますオリンピック・パラリンピック給食ということでございまして、オリンピック開会に合わせて７月に実施をいたしました。フランスで実施されましたので、フランスの郷土料理をアレンジした牛肉のブルゴーニュ風煮込み、フランスのサラダでございますキャベツとニンジンのラペというサラダ、あと、フランスのお菓子、ブラマンジェというものを提供いたしました。こちらが、あと、左側はポスターになっておりますけれども、食の創造館のほうでポスターも作成して、各小学校に貼っていただいてPRも行わせていただきました。

それから、先ほど提言でいただいた地場産物なのですけれども、実施検討会からは、安定的に地場産食材を取り入れるための仕組みづくりが必要ですということをいただきました。今までも地場産野菜の使用につきましては、市の農政課ですとか農業支援センターにご協力をいただきまして、収穫の時期と、献立の使用する時期を合わせて、その都度マッチングをして使用していたのですけれども、今年度からは農業支援センターが市内の農家

を対象に、学校給食への食材納品にご協力いただける方を登録するという仕組みをつくりました。この仕組みをつくりまして、ご協力いただける農家が、どんな食材、どんな野菜が、いつ頃どれぐらいの量をつくれますよということの登録が可能になりまして、見込みが立てやすくなりまして、献立作成に活用しやすくなった。その結果、少し今こちらで、今まではあまり量として使用ができていなかったのですけれども、左上のニラとか下の写真のナスなんかは、今年度かなり多く学校給食にも取り入れております。トマトはもともと結構使っていたのですけれども、さらに量を増やして、またいろいろなメニュー、ラタトゥイユと書いてありますけれども、新しい献立作成にも使用しております。それから、真ん中の写真のトウモロコシですね。こちらは７月17日に中学校のほうで、多分久しぶりにトウモロコシを出したのですけれども、これもやはり海老名産のトウモロコシを使って、この日は海老名の食材をたくさん使用した献立ということで、中学校で提供をしております。このように、海老名産の食材を使うときには、ご家庭に献立表というものを配っているのですけれども、その中でも海老名野菜いっぱいカレーですとか、海老名キャベツを使ったサラダとか、そういった形で紹介をしてPRをしております。

続きまして、こちらはまたお楽しみ給食のご紹介になるのですけれども、人気のメニューとか各地の郷土料理です。左側の写真は小学校で大人気の揚げパンなのですが、中学校のほうでは１学期は提供しておりませんでした。スタート当初ということで、まず、安全・安心で確実な給食の提供を考えておりましたので、なかなか調理に手間がかかる揚げパンというのは１学期はやらなかったのですけれども、２学期になりまして調理員も熟練をしてきましたので、これは10月31日に初めて中学校で提供をいたしました。

右側、真ん中の写真ですけれども、これも人気メニューですね。ボロネーゼなのですが、ペンネボロネーゼも10月31日、同じ日に中学校で提供しております。それから、右側ですね。これは11月14日になりますけれども、中学校は１学期、麺が出せていなかったのですね。これもいろいろ調理が通常と異なるということでやっていなかったのですが、２学期からは麺も提供するようになりまして、リクエストが多数ございました。小学校のときの給食でおいしかったということで、ジャージャー麺がすごく人気なのですけれども、こちらを11月14日に中学校で初めて提供しております。

それから、下の写真は姉妹都市給食ということで、今年、宮城県白石市との姉妹都市が30周年を迎えたということで、それを記念しまして、給食でも姉妹都市給食というものを、小中学校でこちらは実施いたしました。小学校が10月８日と、違うコースでももう１

日、中学校は10月15日に提供しております。北海道登別市も姉妹都市でございますので、北海道の郷土料理のザンギ、それから、右側は宮城県白石市の、うーめんとお麩を使ったおくずがけという郷土料理を提供しております。このほか、この日は宮城県の郷土料理であるずんだ餅もデザートとしてつけております。

それから、こちらは最後のスライドになりますけれども、食育のPRのことについて触れさせていただきたいと思います。食育展ということで、上の写真が６月に市役所の１階エントランスホールで開催しました食育展の様子です。少し写真が細かくてすみません。詳細は見えないかもしれないのですが、中学校給食を再開しましたということのお知らせと、今年、大谷小学校で総合的学習の時間で学校給食でのフードロス削減というものをやっていただきました。この際、教育委員会の職員も講師として授業を実施しましたので、そちらの紹介になります。

下段につきましては、今年で３回目を迎えました学校給食献立コンテストを、毎年夏休みに課題として使っていただいておりますが、こちらの今年度の市長賞と教育長賞を受賞した作品のご紹介になります。レシピ部門に応募していただいた作品は、毎年これまでもアレンジをして学校給食として提供しておりまして、今年度も市長賞のクリームソースペンネと教育長賞の家系スタミナ丼につきましては、それぞれこれは応募してくれたのが、市長賞が小学生、教育長賞が中学生になりますので、小学校、中学校でそれぞれ今後提供する予定でございます。

スライドでの説明は以上になります。

この後、実は、食の創造館別館というものを新しくつくりましたので、そちらの紹介の動画を作成いたしました。そちらをご覧ください。

それでは、動画をよろしくお願いいたします。３分ほどのお時間です。

（説明動画視聴）

ありがとうございます。こちらのPR動画は市のユーチューブでも見られますので、フルバージョン、18分ぐらいあるのもございますので、ぜひご覧いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○内野市長　質問は５分程度なのですけれども、何かありますか。評判はいいのだよな。

私、１つだけ聞きたいのだけれども。１つだけ。例えばカレー。カレーといったら、ビーフカレーとチキンカレーとポークカレーがある。それからキーマカレーがある。４種類もある。そうすると、月にカレーライスって何回出すのか。

○健康給食係長　カレーの回数は、最低１回は出しております。

○内野市長　そうでしょう。だから、そこなのだよね。何でって、家庭で皆さんあれですよ。いらっしゃるけれども、お母さん。大体回りますよね。ローテーションで10日間で同じものが回るよね。下手すると５日間で回るところがありますよね。事実、私も料理を作るので、レシピはいっぱいあるけれども、そんな種類、時間がないと作れないから、一番いいのはルーの味が必要なのですよ。カレーを作ったら次はシチューだよ。シチューを作ったら、今度はハッシュドビーフを作ったり、ハヤシライスを作る。４種類あるのだよ。ところが、学校だけは何しろそういうものを１回しか出さない。子どもが好きなものだから出してあげればいいではないかと思うわけ。私はそこが理解できない。ハンバーグが１回だけなのだよ。ハンバーグだって考えてみて。トマトソースで１回。デミグラスで１回。照り焼きで１回。３回出せるではないか。だってみんな知っているだろうが。市役所の食堂があるのですよ。ハンバーグのときは一斉に売れてしまう。ハンバーグのときは。もう絶対、和食の魚なんかときたら全然売れない。そうなのですよ。大体パターンが同じなのね。

だから、唐揚げなんかだけれども……。今、中華が多くなったので大変なのだけれども、学校のパターンでいくと、何でか分からないの。もう月に１回のそのものが１回だけなのだよ。そうしたら、子どもに人気があるものは２回とか、増やしていくことによって、いいのではないかと思うのだよね。味だって変わると思うのだよね。だって唐揚げだって、普通の唐揚げと甘だれの唐揚げとカレー風味の唐揚げができるではないか。なぜ分からないのか。いろいろなことができるのに、何か固執がね。栄養士が自分の見本を見せたいのだよ。大体、栄養士が考えたものはうまくないのだよ。そうそう。

だけれども、本当に私は思うのだけれども、子どもたちの栄養があるかもしれないけれども、ローテーションをうまくやることによって子どもたちに評価されるという。いわゆる栄養と子どもたちの評価、これを栄養士に分かってほしいなという気持ちで言っていますので、どうかその辺をご理解いただいて、栄養士が作ったものはまずいとか思っていません。どうかそれは訂正をさせていただきまして、よろしくお願いしたいと思います。

○伊藤教育長　栄養士の問題とかがあるのですけれども、実を言うと本当に工夫していて、私と市長は給食が苦手なのですけれども、子どもたちは本当に様々な給食で、栄養士は栄養だけを考えていた。ただ、栄養基準は満たさなければいけないというのは学校教育の条件なので、それを、では、どれだけおいしく食べさせるかということで、結構いろい

ろ調味料を工夫したり、塩分控え目なのだけれども、味をつけるための工夫が結構あった。それを、私たちが小さい頃の栄養士は、栄養をやるのが給食の第一前提で、本当にそういう年代だったので、要するに、子どもたちに不足している栄養というのが戦後始まった原点ですので。でも、今の栄養士というのは、給食は結構工夫されているのかなと思っています。

あとは、使命としては、今、家庭で、カレーやハンバーグは家庭でいっぱい食べてもらったほうがいいのだけれども、要するに、食文化としてどのようなものをするかという体験とか何かという部分が実はあって、本当に給食を食べるのに魚、市長は魚が嫌いなのですけれども、私は魚が好きなほう。焼き魚を出すときに、本当に骨が引っかかるというのが大変なの。でも、子どもたちは骨のない魚を食べるのを練習してもどうなのかなと思ったり、私自身は食べながら自分で思ったりもするので、食による日本の文化の継承みたいなものもあったりして、家庭ではもう作らないメニューをあえて給食で出したりするところにもなってくる。様々工夫して、今おいしいものを作っていますので。

○内野市長　栄養士に対して失礼なことを言ったことをお詫び申し上げたいと思っています。

１つだけ。海老名の一番私がやりたいことが１つあって、子どもたちに海老名の、いわゆる生産されたレタスを５人ぐらいで１個食べてほしいのですよ。生で。生で食べられないのですよ。加熱しないと。そこがガンなのだよね。どうすればいいかということで、教育委員会で少し考えてくれないか。あと、キャベツは千切りにして、もうたらふく、山盛りにしてしまう。もうレタスとキャベツを山盛りにして自由に食べるだけ。あとは、トマトを使っているのだけれども、トマトは大抵調理で使っていると思うのですね。いろいろな。だけれども、日本のトマトって意外と調理に合わないと言われているのですよね。これはもうオーストラリアに行った人がそうなのだけれども、オーストラリアにトマト農家の人が今、パースというところに行って、日本のトマトを持っていったら全然売れなかった。何で売れなかったかというと生で食べる習慣がないのですよ。オーストラリアに。いわゆる調理をする。だから、調理をするから調理用の少し硬めのものを作ろうということで、日本でそういうものを集めていったら、今、相当多くの人を使って、年間２億円から３億円、生産、売れているという話ですから、そういった部分でいくと、日本のトマトが、今もうトマトって高いから、すごく今のところ。たらふく食べられるような形って、すごくいいなと思ったり。

だから、生で食べられるものを何で生で食べさせないのかということを教育委員会と栄養士で相談をしてほしいのですよ。どうすればできるのか。それを県教育委員会とか、県の指導だったら県のほうに言って求めるとか、そうしないと、やはり海老名のレタスってすばらしいな、すばらしいと思っているのですよ。ものすごく。もう１枚目から食べられるような感じなので、どうかそれをやってみたいなと思って、そのまま、ぼんと持っていって、学校でザーっと洗いながら、もう５人ぐらいで、むしゃむしゃむしゃむしゃ、マヨネーズをたらふくかけてというと、またそれもおかしくなってしまうのだけれども。マヨネーズはいけないので。だけれども、大体マヨネーズがおいしいですよね。マヨネーズをガーっとかけて。そういう感じで。その辺はいろいろありますけれども、そういった形で研究をお願いしたいなと思います。よろしくお願いします。

○平井委員　今、市長の話から、ハンバーグにはいろいろなソースがあるというのですけれども、私はやはり食文化の基本が欲しいなと思うと、その基本というのは、だしなのですね。汁の。そういうものの味を子どもたちに味わってほしいなと思います。濃い味は子どもたちは割と慣れているのですが、やはりだしの味というのが、今、子どもたちは、少し薄れているのではないかなって。家庭でもそういう献立を作っていないので。汁物が月に何回出されるか分かりませんけれども、やはりいろいろな、カツオのだし、魚類のだしとか、いろいろなものを取りながら、子どもたちが日本の和食の味というものを、もう一度子どもたちに味わわせたいなと思いますし、そういうことをすることで、多分塩分の量も減ってくると思うのです。

ですから、そういう部分での配慮も給食の中で、家庭が補えない文化を給食に委ねるのはどうかと思いますけれども、そういう部分でも予算のほうにお願いをしておきたいと思います。

○内野市長　よろしくお願いします。今日のご意見。意見が出ましたので、どうかよろしく。

皆さんのほうから何かありますか。保護者の方がいらっしゃいますけれども。

○傍聴人　本日はご説明ありがとうございます。

私の家には小学校１人と中学校１人、息子がおります。いつもおいしく給食を食べて帰ってきて報告をしてくれます。

まず、親の立場で考えたときに、小学校と中学校のメニューが大分違うのですよね。さっき市長がおっしゃっていましたが、カレーを何回か出してほしいとか。それが重なる

と、おうちでの献立作成がとても大変になってしまいます。

それを一言お伝えしたいのと、あと、小学校のほうの話なのですけれども、大分サイクルメニューを使っていらっしゃるイメージです。そして、各国のお料理をたまに出してくださっているのですけれども、そちらが親としてはイメージが湧かないものがあったりとかして、今、インスタグラムで教育委員会がたまに給食の写真をアップしてくださっているのですけれども、ぜひとも、そういうちょっとした知らないメニューというのを、写真にぜひ上げていただけたらありがたいなというところと、あとは、毎日残食を確認してくださっていると思うのですけれども、メニューの、今日はこれぐらいでしたというのを、もし今後できれば残食数量をホームページとかでアップしていただけたら、確認ができるのかなというところを思いましたので、お伝えいたします。よろしくお願いします。

○内野市長　いいかな。加藤係長。

○健康給食係長　はい。

○内野市長　できるよね。それ。

○健康給食係長　はい。

○内野市長　来月からできるよね。

○健康給食係長　メニューについては、本当に今、不定期なのですけれども、インスタグラムで上げていますので、特にやはりイメージがつきづらいものについては積極的に発信していきたいなと思います。残食につきましては、実は先日、校長先生が集まる校長会で、これぐらい実は残食があるのですよということを、教育委員会としてPRというか、情報をお伝えしたところなのですね。ホームページで公開するタイミングとかは、すみません、また検討していきたいと思うのですけれども、まずやはり食育指導ということで、学校の先生方に指導していただければなと思います。

○内野市長　保護者の人も知る必要があるので、残食数なんかは食品ロスの関係も出てくるので、やはり必要だと思うので、よろしくお願いします。即やるように。すぐやる係長だから平気です。

ほかに大丈夫でしょうか。よろしいですか。

それでは、ありがとうございました。今日の議題は全て終わりました。ここで司会を譲ります。

○教育部次長　内野市長、ご進行ありがとうございました。以上をもちまして第１部、協議事項を終了とさせていただきます。

この後、休憩を挟みまして、第２部のリコー様によります企業紹介に移りたいと思います。

（第２部　企業紹介）

○教育部次長　それでは、引き続きまして、リコー様によるリコーテクノロジーセンターの見学会を実施いたします。ご参加の皆様におかれましては、最上階の見学をしていただきますので、係員の誘導により、エレベーターで最上階への移動をお願いします。

12時を目途に見学をしていただいた後、解散となります。

なお、この会場には戻りませんので、お荷物はお持ちいただき、お忘れ物のないようご注意ください。

最後に、次回のご案内をさせていただきたいと思います。次回の総合教育会議は、令和７年２月15日（土）に企業訪問の第３弾として、小田急電鉄株式会社様での開催を予定しております。

多くの皆様に傍聴にお越しいただきたいと思います。

本日は、ありがとうございました。